平成26年度 安曇野検定準備講座

～未来につなぐふるさと安曇野講座～

～第２回講義～

安曇野ゆかりの文学

みらい開館５周年記念特別企画展「安曇野ゆかりの文学」展示会場

とき　：平成26年9月18日（木）午後7時から
場所　：穂高交流学習センター「みらい」
講師　：中島 博昭　氏

講師プロフィール

中島　博昭　　氏（なかじま　ひろあき）

1934年　安曇野市穂高生まれ。
現在、地域史研究家、「安曇野文芸」編集長、安曇野塾運営委員。
長年、松本深志高校など県内の高校社会科教師を務めるかたわら、郷土の優れた人物や文化財の掘りおこしと顕彰、地域づくりに尽力。
前長野県短期大学講師。

著書　『鋤鍬の民権―松沢求策の生涯』
　　『がいどぶっく　安曇野の里　穂高ものがたり』
　　『安曇野に八面大王は駆ける』
　　『探訪・安曇野―その旅と歴史ロマン』
　　『唄え、安曇節』
　　『常念山麓』
　　『犀川川筋ものがたり』
編著　『あ祖国よ恋人よ―きけわだつみのこえ上原良司』
　　ほか。

安曇野ゆかりの文学

’１４．９．１８

★はじめに　日本列島の屋根・北アルプスの麓にひろがる安曇野。複合扇状地の個性に溢れた、豊かな自然風土と豊かな文学土壌。臼井吉見『安曇野』発行が契機に昭和４０年代以降、この地は、絵画・美術・写真を通じて多く伝えられてきたが、古くから表現されてきた文字・文学を通じての人々の営みに、もっと注目して、安曇野をより深く、より豊かに感じ、把握してみよう。参考　安曇野文芸ＮＯ１９・２０　小生作品

★安曇野文学とは　①作品内容の舞台が安曇野　②作家が郷土出身かそうでない作者か
（例　十返舎一九の「御法花」、尾崎喜八の「田舎のモーツアルト」）

★「安曇野」時代への契機－臼井の文学的才能　「安曇平」→「安曇野」――――――
郷土文人使用－明治末　武者小路実篤　山本飼山、昭和初期　百瀬慎太郎　桂川正雄
臼井の大衆化（自身短歌読む）

★安曇野の文学土壌（庶民の暮らしの中に生き続けてきた文学活動）①口承文学・八面大王　②民謡・安曇節文芸（松川村榛葉太生　大正１２～太平洋戦争）③農村歌舞伎（江戸時代～昭和）

★四つの安曇野文学

①臼井『安曇野』　昭和４８年完成。堀金田尻、素封家、明治３８年生まれ
「郷愁の ―― 」唐木順三「複雑広範な現実を人生という全体のなかへおいってみる」
安曇野のれんげ風景（扇央部分）　日本古典と「精神の世界」
自己の人生を、時代と国家を、敗戦という転換点から見なおす
わが郷土が本土決戦の訓練場となって決死の体験をしなければならなかった。

②相馬黒光『穂高高原』　昭和１９年刊。穂高白金、地主・相馬愛蔵に明治３０年嫁ぐ。
「悔恨の ―― 」　わずか四年間の新婚穂高の生活体験が、その後の人生をどう変えたか。とくに優れた安曇野の風景とそれに連動する心の描写。（扇端部分）
明治女学校で鍛えられた感性と知性

③山田多賀市『生活の仁義』　昭和１８年芥川賞候補　明治４０年極貧、田尻生まれ。
「憎悪 ――― 」　小学校４年から瓦職人、仁義、戦争反対、無戸籍の人生送る。

④もうひとつの安曇野文学　平林英子『夜明けの風』昭和４８年芸術選奨新人賞
旧梓川村八景山　明治３５年　地主の生まれ→没落　高等小学校卒で三高・東大の作家と結婚、作家となる。

★その他　松沢求策　上原良司など

安曇野ゆかりの文学

時期	著者・作品	備考
古代	住民　八面大王伝説	
鎌倉	後鳥羽院・西行　有明山の和歌	
江戸	十返舎一九　続膝栗毛　御法花	安曇野の出発
明治	松沢求策　民権鑑嘉助面影　晴雨諸件日誌　和歌	
	藤森寿平　和歌　矢野口保邦　残月集	
	井口喜源治　次郎　荻原守衛　つくまのなべ	
	相馬黒光　穂高高原など　上原三川　俳句	
大正	吉丸一昌　早春賦　斉藤茂　山上など	
	清沢清志　売恥醜文など　桂川正雄　土に育む者	
	榛葉太生　安曇節（讃三千里）　百瀬慎太郎　短歌	
	藤森秀夫　めいめい児山羊　浅原六朗　てるてる坊主	
昭和	山田多賀市　<u>生活の仁義</u>　人間寄進　小穴寿枝　短歌	芥川賞候補
	上原良司　所感　臼井吉見　安曇野など	
	水上　勉　有明物語　平林英子　夜明けの風	
	尾崎喜八　田舎のモーツアルト　西山冬晴　常念快晴	
	北杜夫　神河内　望月市恵　糸魚川街道	
	熊井啓　池塘春草の夢　萩元晴彦　著作集	
	務台理作　務台理作と信州　はまみつを　白樺伝説	
	丸山健二　<u>夏の流れ</u>　バス停	芥川賞
	川端康成・井上靖・東山魁夷　来訪関連文	安曇野の出発

’13．4．1